

第3回 恒久平和に貢献する万国津梁会議 議事概要

日時:2025 年(令和7年)6月 10 日(火)

場所:沖縄県平和祈念資料館 大会議室

秋山 道宏 委員

2章 将来像における「平和」の捉え方(狭義の平和、広義の平和)

① 2章における狭義の平和の前提としての現状認識について、なぜ軍事的な行動がエスカレートしているのかについて、もう少し視点を補足していただきたい。12 ページ3行目の「こうした状況に対して」という部分で、これ自体は恐らく事実としてはそうだろうが、一方でこういう状況の背景、例えば米韓日の合同軍事演習はこの5年で急速に増えている。どちらか先ということではなく、むしろ軍事的な緊張が全体として高まっているからこそ、例えば、北朝鮮も軍事的に対応しているという視点も必要。対応している状況だけを載せても不十分であり、こういう背景がないと全方位的に取り組む意図が伝わりにくい。

3章 恒久平和に貢献するための将来像

② 提言のメッセージ性をもっとバシッと打ち出せるものがあるかなと私も感じた。人間の安全保障が基本的なコンセプトであることはわかるが、それをどう提示するのか。今の県政では、誰も取り残さない、という形で打ち出されているが、似たような形で平和に焦点絞った、沖縄の心を少し言い換えたようなものが必要。戦後史でヌチドゥ宝には生活や暮らしという要素も含まれていると思って研究をしてきた。日々の暮らしがあり、暮らしそのものきちんと成り立つにはどういう暮らしのあり方が必要なのか、そこに踏み込んでいけば伝わっていくメッセージになるのではないかな。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

③ 短期施策でガイドの育成や活躍の場の創出はすごく重要な点だと思う。第32軍の司令部壕の保存公開も動いているので、これらについては県が中心的な役割を担っていくということも含めて盛り込んでいただいく方がよい。

④ 若い世代の継承に焦点が当たる一方で、長年にわたり平和学習やガイドに従事した人々が引退している。体験者と一緒に活動することができる世代がそろそろ最後かとい

うときに世代間のつながりや、平和意識の醸成に関わるガイド養成のあり方に関する言
及が必要。これまでに蓄積されてきたものをはっきりと打ち出し、それを引き継げるかど
うかというのが、ここでいう短期施策の期間の重要なポイント。

5章 将来像の実現に向けた推進体制

- ⑤ 推進体制は平和の拠点としての沖縄の位置づけを高めるために提示することになる。
具体的に進めていくためには、リードの部分で、県として推進体制を構築する必要性を
強調する必要があるのではないか。

長 由紀枝 委員

はじめに、1章 沖縄が恒久平和に貢献する意義

- ① はじめにを読んでいて、文中の「沖縄」、「沖縄県」は具体的には誰を指しているのかと
思った。「県民」と言い換えるほうが良い箇所もあるかもしれないし、しかし県民全体がこ
れに納得しているわけではないだろうとも思う。人間の安全保障が脅かされている沖縄
が、と言うときの「沖縄」は、何を指すのだろうか、政治状況なのか経済状況なのかその
長い歴史なのか人々の暮らしなのか全部ひっくるめて沖縄、あるいは地理的な場所の
ことを言っているのか一度整理が必要だと思った。
- ② 4ページの 22～25 行に、世界の恒久平和ひいては沖縄の平和に貢献するためのメッ
セージとあるが、メッセージだとしたら誰宛なのか。22 ページの 24～26 行目に、沖縄
の微妙な立ち位置が示されている。沖縄は、ある意味徹底的な被害者であるにもかか
わらず、外から特に東アジアの国から見ると日本の一部として、加害者のレッテルも貼
られかねない。このメッセージは国内にだけのものなのか、もしもアジアの地域にも出す
ものなのかそれによって重点を置く場所が異なってくると思う。メッセージを渡す相手の
優先順位というのはある程度つけておく必要はあると思った。

2章 将来像における「平和」の捉え方（狭義の平和、広義の平和）

- ③ 第2章12ページに、人間の安全保障とは、過去・現在・未来の人々を対象とする概念と
いう記述があるが、戦後 80 年に提言を出す意味として、沖縄戦で沖縄の方たちがどの
どれだけ傷ついたのかということを、改めて人間の安全保障という点から触れていただ
いても良いと思った。
- ④ 消極的平和は暴力がない状態だけを指すもので、積極的平和は暴力がないだけでは

なく、構造的な暴力もない状態を指している。消極的平和と狭義の平和、積極的平和と広義の平和は似ているようで違うので、ある意味、狭義・広義とすることで沖縄らしさが出るのかなと思いつつ、積極的平和・消極的平和という方がわかりやすい部分もあるのかと思う。

3章 恒久平和に貢献するための将来像

⑤ 3章は将来像という夢を語る場なのでもっと語っていいと思う。会議のタイトルにもなっている沖縄の元々持っていた万国津梁という役割を果たす、と伝えるとより魅力的になると思う。

⑥ 16 ページの 25、26、27 は主語が長いので「沖縄戦から 80 年が経過する中で、望まれるのは平和を希求する沖縄の心を継承していくことである。そして平和を希求する沖縄の心とは、人間の尊厳を何よりも重く見て戦争に繋がる一切の行為を否定し平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心である。」としてはどうか。

⑦ 16 ページの 5 行目の目指す将来像の二つ目は、広義の平和に貢献する視点から人間の安全保障への貢献とする、というときに、今の書き方では人間の安全保障という概念に貢献すると読めてしまうので、例えば県民および世界の人間の安全保障の実現への貢献とするとか、あるいは足元からというのであれば、沖縄県民の人間の安全保障の実現への貢献とするとしてもいいかと思う。19 行目も人間の安全保障の実現において重要であるとしてはどうか。17 ページの 6 行目の人間の安全保障実現への貢献や、17 ページの将来像②について、沖縄が貢献するのは、世界なのか、日本の人間の安全保障の確立なのか、世界とは言わずにアジアなどでもいいかと思った。

4章 将来像の実化に向けた基本的な方策

⑧ 不発弾の問題は沖縄の過去、現在、未来とも切り離せない問題なので、そういう戦争の後遺症というか、地域とも繋がっていくネットワークの中でそういう部分も入れてもいいかなと思った。

北上田 源 副委員長

3章 恒久平和に貢献するための将来像(メッセージ)

① 狭義の平和が広義の平和の下にあるイメージがわかりにくいのではないかという印象があって、この部分をどう考えればいいのか少し検討したい。

- ② 基地問題は狭義も広義も含めて関わる問題だが、2章、3章にはあまり記述がない。戦争がないだけでなく、軍事そのものにおける平和を考える際に基地でつながってくる。

3章 恒久平和に貢献するための将来像(メッセージ)

- ③ 沖縄から発信する際にどんなメッセージになるのかももう少しわかりやすかったらいいと思う。広島、長崎は核兵器をなくそうというメッセージだが、沖縄からのメッセージが何になるのか。沖縄の経験や現実からメッセージを発信するときに、一体何をメッセージとして打ち出すべきなのかももう少し議論したい。18 ページの図を見たときに上に安全、安心、幸福が実現できる状態、つまり人間の安全保障の確立をメッセージとして打ち出そうとするニュアンスを感じるが、少しわかりにくいのではという印象がある。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

- ④ 前の会議で平和教育の成果や課題の検証が必要と伝えたが、沖縄の平和教育で例えば沖縄戦を扱うにしても、北部、中部、南部で沖縄戦の実相が違う。宮古含めて離島地区では沖縄戦の実相が全然違う。そこでやはりカリキュラムの整備が重要だと思う。カリキュラム整備については、例えば沖縄県の教育委員会が 30 年以上前に平和教育指導の手引きが出されているが、その後に検証がなされていない。難しいとは思いますが、県立高校の数はそこまで多くないので可能だと思うが、県内の小・中学校でどのような平和教育を各学年で実施しているのかを誰も把握できていないと思う。把握できていないからこそ、翌年度に6月に向けての準備がゼロからのスタートになる。カリキュラムを作るためのステップとして、まず各学年各学校で何をやっているのかを把握をして、それを蓄積していくことができれば今後の指針になり、指導の手引きに代わっていくプロセスになると思う。

畠山 澄子 委員

はじめに、1章 沖縄が恒久平和に貢献する意義

- ① 「はじめに」において戦後 80 年と打ち出しているため、提言書でもう少し沖縄戦とは何だったのかを書き込むべきだという気がしている。今日ガイドしてくださった方がおっしゃっていたのは、戦争というものを美化したり肯定したりすることが難しいという話だった。とりわけ住民の視点から見たらそうだという話がすごく強く印象に残っている。戦争という装置に巻き込まれてしまったときに、浮かばれる人はいなかったという話だと思っ

たので、そのあたりの記述がもう少し最初の方にあるといいと思った。参考資料にある沖縄県平和祈念資料館の設立理念は重みのある文章と思っているので、そのあたり参考にしてはじめての 13～14 行目あたりに、沖縄戦を経験した、という記述だけで終わらせてしまわずに書き込んでほしいと感じた。

② 2025 年の国際情勢をどのように書き込むか難しいところ。核軍拡はどの国にも通ずる話として書く手法もある。

③ 軍事では住民の生活が守れなかったことが沖縄戦の経験であれば、戦争も駄目だし、軍事軍拡に頼ることによって、短期的にも中長期的にも人間の生活が脅かされてはいけないという点に加わるとメッセージが見えてくるという気がした。世界が戦争という問題解決に向かおうとしているときに、そうではない国際条約、国連と、国際法という秩序に もう 1 回戻ろうというメッセージがはじめてや 1 章にもう少し入ってきてほしい。

④ 提言だからといって淡白である必要はないと思う。これが現実という意味でおい、おばあんの観点で現状を捉える提言もあるかと思う。

2章 将来像における「平和」のとらえ方(狭義の平和、広義の平和)

⑤ 村田委員長の発言にあったように、11 ページの狭義の平和に取り組む意義については、今も戦争が続いている世界だという認識がどこかに入れば、ロシアやウクライナに対する言及が冒頭でなくともよい。

3章 恒久平和に貢献するための将来像

⑥ 3章は、4章以降は多文化共生などが柱になるので、もう少し多文化共生について記述が少ない印象。資料館で文化を奪われることが戦争の一つのプロセスという展示があった、文化、多文化、人に文化を押し付けない、人の文化を奪わない、という視点がもう少し 3章に入ってもよいと思う。

⑦ 将来像の 1 に入ると思うが、非戦、非核、非軍事などがメッセージの柱の一つになるなら、軍事によらない安全保障のあり方を積極的に発信することが 3 章に含まれてもいいと思った。国連や国際法とか地域の信頼醸成みたいなものを安全保障に関する言論として強めていくことも沖縄の役割であり、沖縄が持っている独自の発信力だと思う。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

⑧ 沖縄は有識者を集めるプラットフォームなどの言論のプラットフォームになりえるといったことが 4 章あたりに入ってきてほしい。

⑨ 官民連携の話では、観光、ツアー、クルーズ業との連携も大いに余地があるのかなと思

った。

- ⑩ 官、民、教育機関は何ができるかという整理の仕方があってもいい。平和教育も、児童生徒にとっては教育だが、大学生や卒業しても関わりたい人にとっては、どう生計立てていくのかという話になる。その場合、企業がどう関わるのかという話になると思う。それぞれのトピックにおけるフェーズごとに関与する機関も変わることがわかると、多様なセクターが関われることが見えてくる。
- ⑪ 施策区分の短期と中期は、短期でいいものが中期に入っている気もする。区分に拘る必要があるのか、再整理があってもいい。

比嘉 千穂 委員

はじめに、1章 沖縄が恒久平和に貢献する意義

- ① 5ページの4行目に沖縄戦以降に人間の安全保障が脅かされているとあるが、沖縄戦以降の期間が対象なのか、もしくはそれ以前のことも踏まえるのか、という点は気になった。
- ② 7ページに沖縄が恒久平和に貢献する意義について沖縄戦以降の話がまとめられているが、沖縄戦以前の万国津梁の精神などの沖縄が大切にしてきた部分もこの中に取り入れることができれば説得力が増す。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

- ③ 21 ページの具体的な内容について、特に小中高における平和学習の充実において平和学習の教材についての記述が良いと思った。
- ④ 34 ページの短期的な施策で、A は紛争がない社会構造への貢献、B は長い目で見た視点で書かれてあると思うが、私の専門は国際協力なので、2 の「多文化理解・共生による学習環境整備」も小中高における平和学習の充実と併せることで、短期的とか中期的な目標でも内容を踏まえてもらえると説得力が増すと思った。

山根 和代 委員

はじめに、1章 沖縄が恒久平和に貢献する意義

- ① 沖縄には非暴力を大切にするヌチドゥ宝の家が伊江島にある。そこの阿波根昌鴻さんが紛争は暴力で解決するのではなく、非暴力で取り組むべきであるとおっしゃってい

る。平和学とか、国連憲章、日本語憲法には、紛争は平和的に解決すべきだっていうことを言っている。現在、ウクライナ、イスラエルとか、本当にもうめちゃくちゃな状況があるなかで、これをどう解決していけばいいのか考えることが大事ではないか。その際に、沖縄のヌチドゥ宝の家のように、地道に基地の問題に取り組むときも、もう暴力は使わないということを学んだことをもっと強調していいことではないか。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

② 国際的な NGO のパシフィック・ピース・ネットワーク (Pacific Peace Network (PPN)) は、米中戦争を防ぐために色々な国の人々が、中立の立場で戦争を起こさせないようにする運動をやっている。6月か8月にウェビナーを開いて、色々な人たちに働きかけていくという取り組みがあり、注目するに値する動きかなと思っている。

村田 俊一 委員長

2章 将来像における「平和」のとらえ方(狭義の平和、広義の平和)

① 11 ページ 23 行目から 12 ページの 14 行目まで狭義の平和に関連する取り組みの意義があるが、私がメッセージとして強調したいのは、12 ページの 9 行目から 14 行目である。この記述が第 1 にきた方がよい。ウクライナや北朝鮮等はコンテキストが全然違うのでロジカルには読みづらい。だからスタートは東アジア地域における経済的な結びつきが密接な本日において、というところから始まった方が読みやすいと思う。沖縄の個性、それから特徴、平和貢献について、狭義の平和の文脈で説明していただければもっとわかりやすい気がする。11 ページから 12 ページにおいて、構成をもう 1 回練り直す必要があるのではないかと思う。

3章 恒久平和に貢献するための将来像

② 18 ページの恒久平和に貢献する方策の図が一番わかりやすい説明。それを狭義の意味の中でもわかりやすく説明すると論理的に読者にわかりやすい。

4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

③ 次世代へのハンドオーバーと若者たちを中心としたイニシアティブの推進とが 21 ページに書かれている。その一つのフレームワークたる小中高の教育インフラと平和教育の内容を充実させていく必要があるということで、教育庁にも関与していただく。同時に、

研究者のみならず市民参加を促す機会をさらに充実させていくということが大切になると思う。

④ 長崎ではナガサキユース代表団という組織が形成されていて、沖縄ユース代表団があってもいいと考える。

⑤ 発信については、メディアと SNS の両方を Z 世代とその次の Ω (オメガ) 世代の方々もひっくるめて若者から発信する。また、やはりメディアを継続的に味方につけて、特徴のある沖縄の発信のあり方を戦略的に構築していく必要がある。

本会議開催前の事前ミーティング

5章 将来像の実現に向けた推進体制(平和研究所について)

① 基本的には研究所をゼロから作る発想ではない。沖縄の内外で既に沖縄に関わる研究は相当進んでいると思っている。沖縄戦後史の領域でもこの 20 年ぐらいで急速に研究が進んできている。きっかけの一つは公文書館の存在が大きい。その存在が研究を後押ししている状況があり、県の関連した機関ということで、大学や公文書館等の蓄積を生かした形で研究所をある種ネットワークングとその取りまとめ的な機関として位置づけていく方が現実的ではないか。

② 市町村による証言の聞き取りも相当蓄積がある。簡単ではないが、それらをどう繋いで市町村と連携するのか。この連携については研究所設立の考えに含まれていると思うが、市町村史の編纂は会計年度職員等の不安定な雇用の中で労働をしている状況があり、こういったところの解決も含めて考える必要がある。

③ 県がきちんとコミットして、沖縄県平和祈念資料館の一室を借りたり、大学と連携したりするなどの平和研究所の発想は良いと思う。

④ 資料館の入口には不発弾のジオラマがある。カンボジア、アフガニスタン、シリアに、ミャンマーなど、平和研究所の中で対人地雷や不発弾の被害地と繋がることも大きなことだと思う。沖縄には対人地雷はあまりないと思うが、地雷、不発弾も一つの特色にもなるかもしれない。

⑤ どこに設立するのかという話はある。広島にしても大学の方に研究所があるので、可能性として大学にも働きかけられれば良いと思う。

⑥ 研究機関として広島のような立派なものを目指したくはあるが、県の事業取り組みなので、いろんな形があると思う。県の資料館の中だったり、県の公文書館だったり、まずは小さく数人程度で始めてみるのが現実的ではないか。

【資料 1】

- ⑦ 史料や史実の大切さを再確認しながら、それらにバックアップされた教育や発信というのは一層大事になると思われる。
- ⑧ どういう体制でというのが難しいところで、長崎の事例である連絡協議会のような形でスタートするというモデルもあり得る。
- ⑨ 色々なところで既に走らせているプロジェクトがたくさんあり、それらからどう相乗効果を得るのか、研究に重きを置くということを共通認識として持ちつつ、そうした観点があってもいいと思う。
- ⑩ 沖縄県平和祈念資料館に来るからこそわかることもたくさんある。場所を訪れるからこそわかるというものを、研究がバックアップする構図になることがとても望ましい。
- ⑪ 平和について沖縄が関わり発信する場は欲しい。やはり建物や、広島、長崎のようなものがすぐにできることは難しいと思うが、県内で取り組まれている方たちと一緒に方向性を決めるなど、どのようにして長期的なビジョンを掲げていくのかをネットワーキンググループベースで進めていくほうがいいのではないかな。
- ⑫ 核実験の被害として明らかにされていないものもあると考えている。そうした被害を明らかにするための研究も必要でないか。NGOには、核被害の事例に詳しい方がおり、連携していくことが重要である。
- ⑬ 県では 41 市町村との既成のネットワークというかインフラが存在すると聞いている。その利用を検討しつつ、研究所が研究者だけで進むというよりは市民参加を得て市民に開放された一つの集いという形で運営されるべきではないか。
- ⑭ マクロな平和研究だけでなく沖縄に特化した形で、沖縄の歴史が沖縄県民のみならずグローバルに共有できるストーリーのようなものが必要。それは研究者、行政、政治家だけが共有するものではなく市民全体に浸透するものであるべき。